

【ポスター発表】

学生と現場で考える東日本大震災の現状と課題

ー震災ボランティアの体験を通しての学びー

○ 愛知学院大学 氏名 城戸裕子 (会員番号 007440)

キーワード：東日本大震災 ボランティア体験 学生主体

1. 研究目的

本研究の目的は、東日本大震災による被災地へのボランティア活動、地域住民との関わり、専門職へのインタビューを通じた学生主体での活動からボランティア活動がもたらす教育的効果を明らかにすることである。2011年3月11日、東北地方を襲った未曾有の震災は、津波や火災、原発被害という複雑かつ複合的な被災状況を呈した。震災当初から多岐に亘るボランティア活動が展開されたが、その中で学生を被災地域に派遣することのタイミングや現地コーディネーターとの打ち合わせ、教育的効果などは未知であり、課題でもある。

本研究では、学生自らが主体的に行動し、活動した震災ボランティアの状況から現状と課題、学びを検証し、ボランティアの在り方と教育的効果を明らかにすることで、体験から得た知識と課題について、次の災害時へ活かす備えにつなげることをも目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究に参加した学生は、愛知学院大学 心身科学部 城戸ゼミ生 12名である。本研究は、観察法を用いた質的研究である。学生ボランティア体験を導入する前に教員が現地に入り、コーディネーターと打ち合わせ、視察を行い、現地の事情を把握し、報告会を開いた。報告会の後に学生自らがグループワークにより、興味のある分野についてテーマを決め、震災ボランティアに対する情報収集と現地コーディネーターとの調整を行った。学生の選択したテーマは「災害時における効果的な救急救命セット開発」、「震災が子どもの心と体に及ぼす影響」、「地域住民との触れ合い」の3テーマである。

各テーマについて現状と課題を明らかにするために、研究協力が得られる対象者の選定を現地コーディネーターと学生が行った。対象者選定が確定後、事前に質問紙を送付し、回答を依頼した。研究期間は、平成26年10月1日から平成27年1月16日である。

分析は、子どもの心と体に及ぼす影響については同行した臨床心理士も交えて場面観察を複数名で行い、その後、行動分析を行った。インタビュー内容のカテゴリー化を行う等、複合的に行った。尚、本研究では学生全員が地域ボランティア体験を行うこととした。

具体的には、地元漁師宅での定置網の整備補助、ワカメ種付け、手芸製品梱包、シイタケ栽培の補助等である。これらは現地コーディネーターに依頼し、学生が様々な体験を行えるように配置を行った。

3. 倫理的配慮

質問紙調査郵送時に依頼書を同封し、研究目的の明記、研究参加についての意思確認と不参加の場合、回答者に不利益が生じない保障、研究協力の際に考えられる時間への影響と回避について、回収後のデータ管理について、質問紙設問に関しての個人情報保護、研究成果の公表について、調査に関する問い合わせ等への対応を明記した。

インタビュー時のICレコーダー使用、写真撮影についても同様に書面並びに口頭で説明を行い、同意を得た。未成年者の場合、同行した保護者の同意を書面で得た。

4. 研究結果

①災害時における効果的な救急救命セット開発グループ

震災時に活動した救急救命士、避難所となった学校で対応した養護教諭にインタビューを行った。事前に学生が作成した救急セットの画像を送付し、使用可能か改善の必要性があるかの議論を行った。救急救命士と養護教諭の災害時における救急救命セットには、用途に救命優先度や緊急度、トリアージ対応についての差異があることが明らかとなった。

②震災が子どもの心と体に及ぼす影響グループ

子どもと保護者と共にゲームを行い、意思疎通を図った。遊びを通して子どもの行動観察を臨床心理士と行った。不安から生じているであろう行動を呈する子どもについて、個別に保護者グループへのインタビューから震災後の変化の聞き取りを行った。結果、子どもは時間の経過に関係なく、心的ストレスを常に抱えている現状が明らかになり、特に保護者から離れた場合や他者との新しい関係性を構築する際に行動を呈することが明らかになった。

③地域住民との触れ合い体験グループ

地域住民の生業である漁業、農業体験を行った。震災により、人的資源が足りない現状が明らかであり、高齢層の従事者が多い。震災を機に開始した事業についての住民間意識の相違も存在した。ボランティアで参加した学生に自身の体験や悩みを打ち明けることで心の平安が保たれている現状もあった。

5. 考察

学生が自らの疑問や課題について、現地コーディネーターとの調整を行い、実際に被災地に出向き、インタビュー等を行い、ボランティア活動を被災された方との交流など、学生主体で体験することは、より強く印象に残ったと考える。学生が「来なければわからないことが沢山あった」、「想定していた被災地のイメージと実際とのギャップが大きかった」

「被災地は同じ日本の国のことなんだ」等の発言からも、学生に与えた影響は大きいと考える。災害ボランティアについては、現地コーディネーターとの協力なしには成り立たない。また安全確保のためには教員側の事前訪問を行うことにより、現地の状況をより具体的に学生に示すことが可能となると考える。学生にもたらす教育的効果として「いのち」や「当事者意識への関心」が挙げられた。